

学 位 論 文 要 旨

氏 名 趙 從勝

題 目 中国・海南島の農業近代化
—日本占領時期の海南島農業調査・開発・教育を中心に—

本論は、日本占領時期の海南島農業開発を中心に、それ以前の中華民国時期とそれ以降の新中国時期を含め、海南島農業近代化の過程を時系列に考察したものである。

まず、第一章「中華民国時期の海南島農業調査・開発」は、中華民国時期の外国人・中国人による海南島調査実態の解明および政府側・民間側による海南島開発計画・開発成果の考察を行った。その中、1930年代、華僑による熱帯経済作物のゴムや珈琲農園というプランテーション農業および政府主導の水稻・甘蔗の品種改良という西洋技術を用いた近代的な農業開発活動の出現により、海南島農業が近代化の道を歩み始めたことから、民国時期は海南島農業近代化の萌芽段階にあったと結論した。

次に、第二章「日本占領時期の海南島調査・開発」は、日本軍による海南島占領に至る原因および海南島軍政組織全体像の解明から着手し、海南島農業政策の変遷・農業調査の全体像および日本人調査員の調査提言に基づいた開発理念、農業開発の展開、日系進出企業による海南島農業開発経営の内容、台湾総督府の海南島関与、海南島教育と農業開発の関連性を政策上、実際上から考察した。これらの考察によって、日本軍は、主に品種改良・優良品種の導入を中心に、水利施設の建設・肥料の施用等近代的な農業技術を用いた農業開発を日本内外地の企業に委託し、農業生産を行わせた。その結果、日本軍による海南島農業開発は、「日本帝国」の南進および総力戦に食糧の供給という役割の一翼を果たしたが、海南島全体の農業生産を向上することができなかった。しかし、品種改良と普及が行われたことにより、稲作・甘蔗等作物の単位生産量が向上したことが明らかとなった。また、教育の面においても、日本軍は、海南島農業を日本の総力戦の中に組み込むために、実業教育、就中農業教育を師範教育課程の中に導入し、農業を中心とする実業人材の養成を図り、海南島農業開発をバックアップしようとした。このような品種導入・水利施設建設というハード的な側面および農業教育というソフト的な側面から海南島農業活動が行われたものの、農業技術が海南島に十分には定着しなかったことを鑑みて、日本占領時期は、海南島農業近代化の基礎構築の段階にあったと結論した。

最後に、第三章「新中国時代の海南島農業」は、1949年中華人民共和国建国後の土地改革時期、人民公社時期、改革開放時期の農業（農業技術）の発展状況を考察した。1978年の改革開放を区切りに海南島農業は栽培面積の拡大と品種改良による食糧作物の増加という発展形式からハイブリッド品種の普及による食糧生産高の増加と経済作物の普及による農村経済の活性化という発展形式へと大きく転換した。その中、海南島政府は本島農業開発に対して、以前の中華民国時期と日本占領時期と同様に、品種改良を中心とした食糧作物の生産に重点を置いた。その他、水利施設の完備・耕作制度の最適化・化学肥料施用の普及等全般的農業活動も継続的に行われたことにより、海南島農業は、古来の米作中心の自給型農業から脱却し、果物・野菜等を中国内地に移出する商業型農業に移行することができた。よって、新中国成立後の長期間にわたって、海南島農業は完全に近代化を遂げたことを明らかにした。

つまり、海南島農業近代化の過程は、中華民国時期は農業近代化の萌芽段階にあり、日本占領時期は農業近代化の基礎構築段階にあり、新中国時期は農業近代化の完成段階にあったということである。

しかし、中華民国時期・日本占領時期・新中国時代の海南島農業開発には、以下のような共通点があった。

- ①農業経営の形態からみると、民国時期は華僑農場、日本占領期は日系企業農場、新中国期は国営農場と異なっているが、いずれの時期も同様にプランテーション農業であり、ゴム・果物、甘蔗等を含むマルチカルチャ農業経営方式であった。
- ②品種改良・優良品種の導入の点からみると、三時期ともに優良品種の導入改良を行っていた。即ち、日本占領期は民国期の品種（海南島在来種）を試験栽培し、新中国期は、日本占領期に導入した品種（嘉南2号・台中65号）を試験栽培していた。
- ③三時期ともに外部の経験を用いたこと。民国初期は南洋地域のゴム・コーヒー栽培経験、日本占領時期は台湾経験、新中国時期は広東省の潮汕経験を活用していた。
- ④食糧作物の生産は、三時期共に最優先の課題として行われていた。

この4点から、海南島農業近代化の過程においては、歴史的継続性があった。また、教育の面において、海南島民は日本人の教育を受けて「文盲」から脱却し、知識獲得の楽しさを知り、戦後海南島の教育・農業等分野に活躍していたことから、戦前・戦後の歴史的継承性があった。

本論は、日本植民地研究史において歴史的継続性を解明したことに意義があり、海南島史研究において農業発展段階を解明したことに意義がある。また、教育実践研究上においては、日本軍による海南島農業開発は、学校の生徒に対して戦前期の日本人（軍）の海外活動をより全面的に認識させる教材となるのではないかと考える。さらに、日本占領時代の海南島教育からみると、戦前期の師範教育・初等教育は、日本語、数学という基礎教養科目以外に、農業・手工といった「勤労精神」を重んじた科目を多数設けており、日常生活での時間遵守・挨拶等礼儀も生徒に要求していた。このような教育理念は今日の青少年に対する教育においても意義が大であると考えられる。